昭和43年度　日本草地学会秋期大会開かれる

8月28日29日の両日、エルムの学園北海道大学において日本草地学会第16回大会が開かれ、全国の大学、試験場から約400名が参加、北海道からも草地関係技術者が多数参加、草地の問題全般について多くの研究発表、シンポジウムがありました。

第1日（8月28日）　一般講演

講演は3会場に分かれ、生理・生態、栽培、病害虫、土壌肥料、草地造成・管理、放牧、貯蔵加工、飼料成分・飼養等の問題について65題の一般講演がありました。

雪印種苗からも上野幌育種場の三浦が“イネ科牧草放牧型品種の特性調査”(1)採食残茎部の節密度について、(2)日長感応度について、兼子が“赤クローバの4倍体育成に関する研究”、松原が“輸入牧草種子中に混入してくる雑草の種類とその特性”について研究発表致しました。その他今回の研究発表は、今後の実際面に大いに役立つと思われますので、別の機会に本誌で紹介したいと思います。

第2日（8月29日）特別講演

第2日目は同じく北大のクラーク会館において、午前中は、町村牧場の町村敬貴氏が「北海道における酪農100年の歩み」を題し、牛の品種改良のみならず、はじめから牛づくりの基礎は土地作り、草づくりにあるとし長年に亘り氏はアルファルファ栽培にも心をくだき、その高い技術水準は、範とするところです。

また帯広畜大の大原久友教授は「北海道における草地研究の歩み」と題し、北海道開拓使から北海道庁となり、その後数回の戦争と共に軍馬の需要が増し、牧野の利用・拡大から酪農も本格化し、戦時体制下の牧草種子の自給の時代を経て、戦後20数年の間に酪農の飛躍的発展と共に草地研究も今日大きな進歩、成果をみている。

氏はこれからは草地酪農こそ大切であり草地の開発利用を強調された。大原教授は今日なお第一線の研究者、指導者として活躍されております。

このあと遠路西ドイツからF．Rボンマー氏（西ドイツ農業研究所長）が「ヨーロッパ諸国における草地研究上の諸問題」と題し、北海道と多くの共通点をもつ集約放牧（ストリップグレージング）、グラスサイレージの問題永続性で嗜好性よく、生産力の高い草種、品種の利用等の重要性についてのべられた。

同じく西ドイツギーセン大学教授のL．クリューガー博士が“環境と家畜生産”と題し世界的視野から広く地球上の各地で飼われている家畜と環境の関連について長年の研究成果を講演された。

シンポジウム

2日目の午後は“公共草地の推持管理技術の確立と運営について”という課題で下記の5人の講師の方々が、課題提供者となり、質疑討論を重ね、公共草地における現在の問題点、将来のあり方等の追求がなされた。

①北海道における公共草地の現況

土井健治郎氏（北海道農務部酪農草地課長）

左ボンマー氏、右クリューガーの両氏に花束が贈呈された。

②公共草地の維持管理上の問題点

早川康夫氏（北海道農業試験場草地開発部）

③公共草地における放牧、採草、利用上の問題点

高野信雄氏（北海道農業試験場草地開発部）

④公共草地における家畜の問題点

桜井　充氏（道立中央農業試験場畜産部長）

⑤公共草地の運営について

松本達夫氏（北海道開発局農地部計画課）

現在本道の公共草地は約8万haでその内牧草地化されているのは1.3万ha程度であり、野草地が多く草地改良の余地は大きい。さらに昭和46年までに個人草地を中心に14万haの草地造成が計画されている。

これからは益々育成牛飼育が公共草地で行われるようになり、北海道のみならず府県の育成牛を預るケースも増大し、草地管理技術ばかりでなく、経営的な体質改善赤字の解消が強く望まれる。

草の利用率を高める為の早期放牧、牧養力は300 cow day（頭日）位におさえ（10アール3トンの草生産量）、周年預託の牧場では、採草地に堆厩肥の環元や、追肥代等の維持費の節約等経営的にみて有利な技術体系も確立しなければならない。現段階でも、公共草地での育成の方が自家育成よりもはるかに割安であるので、利用農家に積極的にPRし、頭数の不足をきたさないような指導も望まれる。